家のつくり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 早川, 聖哉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23886

3. 家のつくり

早 川　聖 哉

1.　はじめに
2.　伝統的な家の特徴
3.　家と人々の暮らし
4.　家の変化と震災
5.　考察
6.　おわりに

1.　はじめに

調査実習で黒島・道下の町中を歩き回り、様々な方の家を訪ねる中で私はこの地区の家が持つ独特な雰囲気に興味を引かれた。日の光を浴びて輝く黒瓦、ぎざぎざとした外壁、格子のはめられた窓、などといった一目で分かるような外的な特徴に、私は古風な印象とともにどこか物珍しい印象を受けたのである。こうした特徴を黒島・道下地区の多くの家が共通して持っており、その町並みには統一感さえ感じられた。

他所から来た者である私がそうであったように、その土地の町並みはその土地のイメージを決める上で重要な要素となりうる。そして、その土地で暮らすものにとっても家は生活の場として欠くことのできないものである。このように「町」の外の者、中の者の両者にとって家は大きな意味を持っている。また、現在でこそ家の標準化・均質化が進んでしまっているが、近代以前の家はその土地の生活・風土などを大きく反映するものとして重要な位置を占めていた。

本章では、時代の流れや建築技術の向上により家の標準化・均質化が成されていく中で、黒島・道下に残る伝統的な家は一体どんな特徴を持ち、そこでの人々の暮らしはどんなものだったのか、その変化と共に見ていく。

2. 黒島・道下の伝統的な家

黒島・道下地区では多くの家が後述するような特徴を持つ。ここでいう伝統的な家とはそうした特徴を持つ家を指すこととする。また、黒島・道下で異なる点についてはその都度ふれていく。以下、家の特徴をそれぞれ述べていく。

＜構造・間取り＞

戸を全て外すと大きな広間になる、いわゆる「田の字型」造りが一般的である（図1・図2参照）。「田の字型」造りの家は風通しも良く開放感があったが、家の中心に柱がなく、壁には“筋交い”も入っていなかった。“筋交い”とは家の軸組に耐震性・耐風性を増すために挿入する斜材のことで、これが入ってなかったために「田の字型」造りの家には地震に弱いという欠点があった。こうした欠点に対して、K氏（70歳代、道下の女性）の家は“火打ち張り”をして備えていた。この“火打ち張り”とは家の天井の角を補強し、歪みを少なくするために付ける斜材または板のことである。K氏によるとこの“火打ち張り”のおかげで地震が起きても倒壊を免れることができたそうである。柱は四寸角のものが一般的であったが、田の字型の構造を維持したまま耐震性を強くするにはこの柱を五寸角にする必要があった。また、1階を生活の場、2階を蔵として使っている家もあった。部屋の仕切には襖や、障子の枠にすだれをはめこんだ簾戸が使われていた。簾戸は夏に風通しを良くするために用いた。

図1： 黒島地区の家

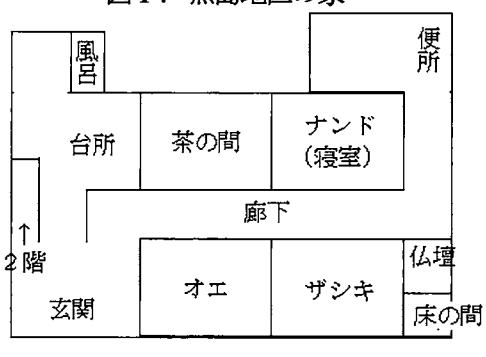
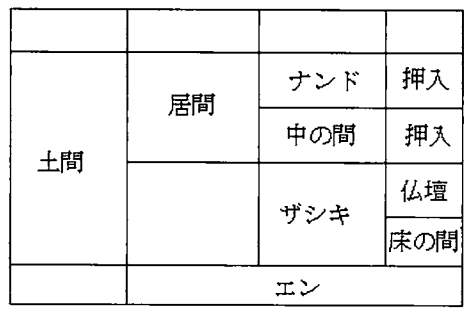


図2： 道下地区の家



黒島は船員の町であり、道下は百姓・職人の町であったため、道下の家の土間（通り庭）のほうが一般的には広かった。土間は主に収穫物の土落としや作業をする場所として使用された。図1の黒島地区の家屋では土間の位置を台所が占めているが、土間は昭和40～50年代にかけて台所などに改築され、減っていったという。乾燥させた稲などはザシキにつめていた。また、オエ（居

間）には囲炉裏があり、一家団欒の場として使われていた。囲炉裏について詳しくは後述する。寝室としてはナンドが主に使われていた。

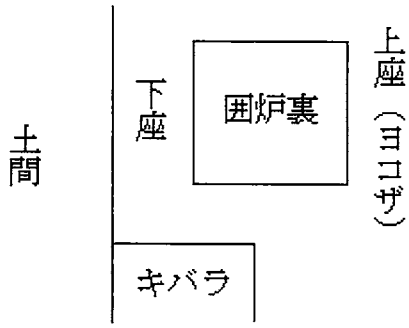
<材質>

一般には自分の山を持っている人はその山の木を使い、その分の費用を引いてもらって家を建てることが多かった。そのため使われる木材は様々であったが、主にアテ（あすなろ）の木や杉の木が使われた。道下では自分の山の木を使い木材を統一して家を建てる人が多く、一方で、黒島では良質な木材を買うなど質にこだわって家を建てる人が多かった。また、1年ほど前から木材を取り寄せて、乾燥させてから建築にとりかかる人もいた。しっかりと木材を乾燥させることでより頑丈な家が建てられるという。

<囲炉裏>

囲炉裏はオエにあり、家族や来客の座る位置は大体決まっていた。

図3： 囲炉裏と座



（聞き取りより、筆者作成）

A氏（60歳代、道下の男性）によると、上座（ヨコザ）には家長、主に父親が座った。家族の他の者がここに座るのは許されなかったと言う。下座には女性の家族が座った。キバラには薪がつまれていて、そのそばに座る母親や祖母が薪を囲炉裏にくべる役割をした。また、囲炉裏の周りの他の場所には男性の家族が座ったが、来客時には上座から見て左側の席に客が座った。

昔は囲炉裏で子供たちが芋や栗を焼いて食べたり、家族そろって暖をとったりなど一家にとって囲炉裏は欠かせない存在であった。しかし、囲炉裏には赤ん坊や子供が火傷をする危険性やほこりが立ちやすいなどの問題点があった。その上、現代の家は窓にサッシを入れることで気密性が良くなったが、そのために囲炉裏によって暖をとることが危険になってしまったし、囲炉裏に

よって発生する煙に弱いものが多い。加えて、ストーブなどのより便利な暖房器具が登場し、それに伴い、薪からガス・石油などへと燃料が変化していった。こうした理由から、現在では囲炉裏は残ってはいるが、ふたをしてしまい使っていない家がほとんどである。

＜屋根＞

“黒瓦”を使用した瓦葺屋根が一般的であるが、黒島のほうが黒瓦に統一する傾向が強いように思われる。S氏（70歳代、黒島の男性）によると、昔は黒島には瓦葺屋根が多く、道下には茅葺屋根が多かったという。また、T氏（70歳代、道下の女性）によると、茅葺屋根は嵐のたびに修理をせねばならず、費用もかさんだため、昭和43（1968）年に瓦葺屋根に改築した。当時の瓦は現在の瓦に比べて重かったという。

写真1　下見板

＜外壁＞

家の外壁は黒島・道下共に“下見板”と呼ばれていた。これは古くから伝わる木造住宅などの外部板張りの一種であり、横に羽重ねにして張りあげる板のことを指す。この“下見板”は傷んだ板を1枚ずつ外せて、修理も楽なために昔から好まれたそうである（写真1）。

＜窓＞

主に黒島地区に多く見られた特徴だが、木製の“格子戸”が窓の外にはめられていた。これは外からは中の様子が見えず、中からは外の様子が見えるような造りになっており、内部のプライバシーを守るカーテンのような役割をした。また、風通しを良くする効果もある（写真2）。

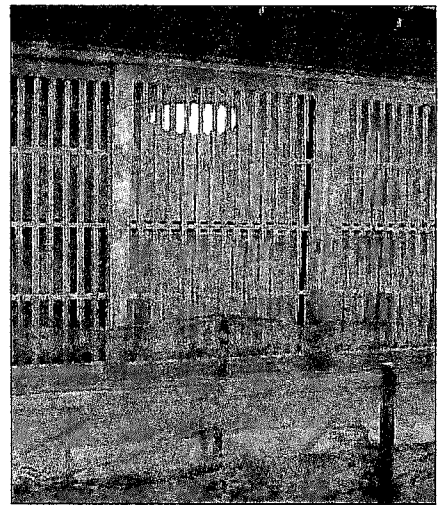


写真2　格子戸

＜さがり＞

こちらも主に黒島地区で見られた。家屋の入り口の上

方に取り付けられた板を“さがり”という（写真3）。

黒島地区では町並みの保存制度により、“黒瓦”、“下見板”、“格子戸”、“さがり”の 4 つの特徴を黒島の伝統的な家の特徴としており、建て直しの際に気をつけるように呼びかけられている。

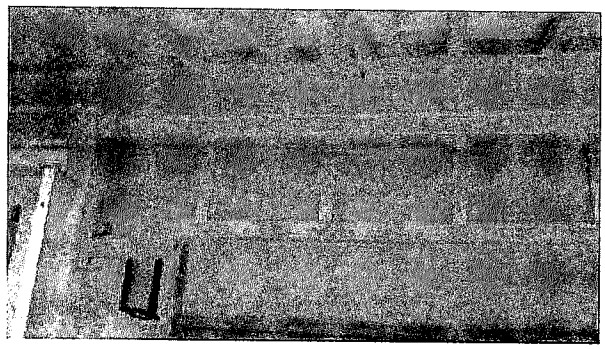


写真3　さがり

＜蔵＞

敷地内に家とは別に蔵を併設している世帯も多い。この蔵は土壁を筒にして立てたような簡単なつくりのもので、壁には筋交いも入っていなかった。また、ほとんどの蔵が家と比べて古く、重い瓦を使っていた。そのため家と同様、もしくはそれ以上に地震に弱いという欠点があった。

3. 家と人々の暮らし

ここまで黒島・道下地区の伝統的な家が持つ特徴について見てきたが、続いてそこでの人々の暮らしがどのようなものであったか、黒島と道下の場合でそれぞれ見ていきたいと思う。

＜黒島の場合＞

黒島は江戸から明治時代にかけて北前船の港町として栄え、廻船業が盛んであった。また、北前船の衰退後も船員を生業とした人が多くを占める船員の町であった。元船員の K 氏（70 歳代、黒島の男性）によると、約 3 ヶ月かけて世界中に荷物を運搬していたため、家に帰れるのは 1 年に 1 度くらいだったという。このように黒島の男性は出稼ぎに行き、1 年のほとんどを船上や他所の土地で過ごしていたため、家とのつながりは希薄であったと言える。対して、黒島の女性は夫が出稼ぎに出ている間、家と子供を守る必要があった。黒島は下地が砂地であるため農業をするのは困難であったが、女性たちは小規模な畑で野菜の栽培、豚などの家畜の飼育、養蚕などをして過ごしていた。船員業は危険な仕事であったため給料も良く、家には女性と子供とお年寄りという家庭がほとんどであり生活費が安く済んだため、夫の送金にはほとんど頼らなくても生活できていたとのことである。

こうした背景から黒島には比較的裕福な家が多かったが、もちろんその中でも多少の貧富の差は存在した。S 氏（70 歳代、黒島の男性）の話によると、黒島では上の方（比較的高所）にある家ほど裕福であり、下の方（比較的低所）にある家は貧しい家が多かった。また、天領祭の際に

曳山が通る大通りに並ぶ家には裕福な家が多かったという。黒島においては家の大きさや材質などといった外見的な特徴だけでなく、町における家の位置も住人のステータスとなっていたのである。こうした理由から、黒島では昔から「土地だけは売るな」と言われてきたという。

<道下の場合>

黒島では廻船業や船員業など海での仕事が中心であったのに対して、道下では農林業を生業とする人々がほとんどであった。また、先述したとおり、道下は木挽きや屋根葺き職人など多くの職人たちが暮らす職人の町でもあった。道下における農業の主要な生産物は米や葉タバコであった。特に葉タバコ栽培は昭和30年代に最も盛んになり、多くの家が専売公社から苗などを借りて葉タバコ栽培を行っていた。T氏（60歳代、道下の男性）によると、当時の道下には収穫した葉タバコを乾燥させるための土で作った乾燥蔵があり、その中で3～4日間火をかけて乾燥させていた。T氏が小・中学生の頃、父親が葉タバコ栽培を行っていたためT氏もそれを手伝っていた。ボイラーで火をかけた乾燥蔵の中は真夏のように蒸し暑かったという。葉タバコ栽培のピークは昭和39～41（1964～66）年頃であったが、現在でもいくつかの乾燥蔵は道下に残されている。こうした背景から、道下には収穫物の泥落としや仕事をする場として広めの土間を持つ家が比較的多かった。また、広い土地を持つ世帯は敷地内に家・蔵・作業場を併設することもあった。

かつては地元の大工や職人たちが黒島・道下の家を建てていた。K氏（70歳代、道下の男性）によると、家を建てるときには大工・木挽き・木を山から下ろす馬を扱う人など、それぞれの職人に依頼をした。K氏は昭和56（1981）年に家を建て替えたが、当時は大工が設計と建築の両方を行ったという。現在では両地区共に大工は数えるほどに減り、震災の復興時も人手不足のために他所からも建築会社を呼んで建て直してもらったとのことである。昔ながらの伝統的な造りで建て直してもらうことも可能だが、その場合は新しい造りで建て直すより余計にお金がかかるそうで、あまり元通り建て直す人はいないそうである。

黒島・道下の両地区に共通して、家は結婚・葬式・集会などの行事を行う場でもあった。これは、当時の家が仕切りを外せば大きな広間となる“田の字型”造りであったからこそ可能であった。T氏（80歳代、道下の男性）によると、道下では昭和40年代～50年代半ばにかけて公民館での結婚式が幾度も行われ、家で結婚式を行うことは稀になっていったという。その後は冠婚葬祭施設の発達により、現在では結婚式・葬式はセレモニーホールで、集会は公民館で行うのが一般的となっている。家に多くの人が集まる機会がなくなることは“田の字型”造りの利点が1つ失われることを意味する。A氏（60歳代、道下の男性）によると、昔の家の造りは地震に弱く、暮れになると海からの風が吹きつけて寒い。その上、屋根の隙間からあられが入ってくることもあった。

また、近頃は子供たちも個室を欲しがる。機能性を追及するならば昔ながらの“田の字型”造りにする必要性はないという。

4. 家の変化と震災

ここまで伝統的な家とそこでの人々の暮らしについて見てきたが、家に住む人々の生活が変われば、家のつくりも当然変化してくる。戦後の経済発展に伴う家の標準化・均質化の影響は黒島・道下においても少なからずあったが、それ以上に平成19（2007）年の能登半島地震が家に与えた影響は特に大きい。この地震により黒島・道下共に多くの家が全壊もしくは半壊し、家を建て直し、変化させる大きなきっかけとなったのである。本節では震災の体験談などを通して家の変化について見ていく。

H氏（80歳代、黒島の男性）

地震が起きると家全体が海の方に引っ張られるように揺れた。ガラス戸がねじれ割れ、柱は全て折れてしまったが、土台はかろうじて大丈夫だった。離れと蔵はくっついていたためにつぶれてしまった。もし、家もくっついていたら一緒にやられていただろう。庭を抜けた先にある書斎は無事だったので2007年の3～12月まではそこで生活した。納屋はキッチン兼食堂として使った。農協の保険で550万円、全壊手当てで300万円、その他建物共済や県民共済からもお金が下りた。建て直し時には基盤を鉄筋コンクリートでしっかりと強化した。建て直された家は景観保存に配慮しており、先述した黒島家屋の4つの特徴を兼ね備えた家であった。

K氏（80歳代、黒島の男性）

K氏は幕末から明治にかけて活躍した船問屋、角海家の末裔である。蔵3棟と屋敷が県の文化財指定建造物であったが、震災により大きな被害を受けた。座敷の梁や多くの瓦が落ちてしまったが、太い梁と無事だった支柱でなんとか支えきり、全壊はまぬがれた。しかし、補強工事が済むまでの1ヵ月ほどの間入ることができなかった。屋敷の修理には総額で5億円ほどかかり、そのうち1億5千万円をK氏が負担しなければならないという。現在住んでいる家（離れ）の修理や車庫にお金を出したため、修理代まで出すことはできず、K氏は屋敷を市に寄付した。文化財としての価値はあるが実際に住むとなると火の危険などが怖いし、住まないと腐ってしまうし、保存維持費もかさむなど苦しい面も多いとK氏は言う。

黒島ではほとんどの家の瓦が落ち、震災により約40戸が全壊に近い状態になった。しかし、建

て直した家は少なかったという。黒島には離れを持つ家も多く、離れは比較的新しいものが主なため震災を耐え切った。離れと言っても立派なものではなく、子供の勉強部屋として建てたものがほとんどであったが、そこに建て増しして現在も住んでいる人もいる。一方で、多くの家の土蔵は全半壊した。そのため物置を買う家も多かった。半壊の土蔵も取り潰した家が多く、少しもったいない気もすると言っていた人もいた。黒島には空き家が多かったが、壊すのはもったいないのでお盆などで親戚一同が集まるのに使われていた。しかし、空き家だった家はなかなか修理してもらえず、更地になってしまった家もある。また、高齢者の独居・夫婦世帯が多いため震災をきっかけに2階建てから平屋にした家や、家を建て直さずに施設に入った1人暮らしのお年寄りの例もある。第2節でふれた町並みの保存制度に関連して、黒島では伝統的な家屋の特徴を継承し、市から伝統的建造物保存地区の認定を得ることを目標としたまちづくりが進められている。そのため、震災後の復興も景観保存を意識したものとなっていた。

W氏（60歳代、道下の女性）

花を生けていたらドーンという音がして地震だと気づいた。玄関の方の被害が大きく、戸をやられてしまった。2階は被害が小さく、離れは新しかったためびくともしなかった。蔵と納屋も大丈夫だったが、全体的に壁にはひびが入って被害が大きかった。棚も全て倒れてしまった。“田の字型”造りの家だったが震災後は壁を作って強度を増した。修理には2ヵ月ほどかかった。

M氏（80歳代、道下の男性）

家は築25～6年でつくりが丈夫だったため、壁がはがれたり、ひびが入ったりはしたが、大きくは壊れなかった。しかし、車庫、離れ、小屋が壊れてしまい修理には200万円ほどかかった。一部損壊では補助金は3万円ほどしか出ないので、多くの人は補助金だけでは足りず、自分でお金を出して建て直した。

道下では震災前は家・蔵・作業場が併設されていて土地が狭い世帯が多かった。黒島に比べて若い家族の世帯が多少存在するとはいえ、やはり道下も高齢者のみの世帯が圧倒的に多い。そうした理由から、震災後に建て直した家は広くする必要性がないため、道下の場合も以前より小さい家や平屋建ての家が多く、新しい家は従来の“田の字型”造りではなく部屋ごとに壁で仕切られた家も多かった。また、土蔵が壊れたので物置を買って置いている家もあった。それで土地が以前よりも広くなったそうだ。道下は震災後の復興が早く、景観保存についてはあまり考えずに家を建て直した。平成19（2007）年10月になってやっと県は景観保存を考慮して家を建て直したら支援金を出すと言ってきたが、すでに復興はかなり進んでおり1度立てた家を崩すわけにもいか

ず、どうしようもなかった。そのため、道下は古さと新しさが融合したまちづくりを目指している。

5. 考察

以上で黒島・道下両地区の伝統的な家について述べてきたが、今回「家のつくり」について調査してみて「家」とは人々にとって何なのかを改めて考えさせられた。現代を生きる私たちにとって家はもちろん帰る場所であり、生活のベースとなる場所であり、それは今も昔も変わらないだろう。しかし、現代の家の多くは戦後の経済発展の影響により均質化・標準化された家であり、その地域独特の特色を色濃く反映している場合は稀である。言ってしまえば、日本中どこに行っても似たような家がほとんどを占めている。一方で、かつての家は第一に生活の場であり、仕事の場でもあり、交流・儀礼の場でもあり、ありとあらゆる出来事の中心となる場所であった。人間は家で生まれ、家で過ごし、家でその生涯を終えた。その一生がまさしく家と共にあったのである。黒島・道下においては土間造りが仕事の場としての役割を、“田の字型”造りが交流・儀礼の場としての役割を家に対して与えたと言えるだろう。どちらも現代の家ではほとんど失われてしまった機能である。また、仕切りが少ない“田の字型”造りや囲炉裏といった伝統的な家の構造、そして農作業などの仕事を家族で協力して行う必要があったという事情からして、かつての家族は現代の家族以上に強い絆を結んでいたはずである。

だが、そうした一方で伝統的な家にも良い点ばかりがあるわけではないということを改めて実感した。冬になれば隙間風や雨、雪などが入ってきて寒いし、地震にも弱い。囲炉裏を家族で囲むのは一家団欒に一役買っていたと思われるが、子供や赤ん坊が火傷をすることも今以上に多かっただろう。たまにやってきて伝統的な家の独特な造りや特徴を見て楽しむのと、実際にそこで1年365日住むというのではやはり全く違ってくる。私の実家はいわゆる標準的な家であり、私自身伝統的な家で暮らしたことがないのでその苦労の程は想像しえないが、やはり便利さを重視するならば伝統的な昔の家は現代の家には到底敵わないのだろう。それは認めざるをえない。事実、両地区共に昔の家は不便だったという意見が多く、震災後の建て直しの際にも伝統的な家の造りで建て直す人は稀だった。生活の不便さ、住人の家族構成の変化、金銭的問題など、その要因はさまざまあるが、伝統的な昔ながらの家が減っていくのは第三者の目から見ても少し寂しい気がする。しかし、いわゆる標準化した新しい家を求める傾向が強くなっているとはいえ、両地区共に根底にはできることなら昔ながらの独特の町並みを残していきたいという気持ちがあり、自分たちの町に誇りを持っているように感じられた。

時代や社会の変化により、式場・集会場・仕事場など、かつては家が担っていた役割の多くを

別の施設が代わりに行うようになった。「家の役割の変化」と「家のつくりの変化」どちらが先に起ったのかは分からないが、確実なのは家の役割、そして人々にとっての「家」という存在が多少なり変化してしまったということである。伝統的な家と現代の家、どちらにも一長一短があり、どちらがいいとは決め付けることはできない。現代の人々が便利さを追求した結果伝統的な家が淘汰されていったとしても、家の価値というのは相対的なものであり、はっきりと優劣を付けるべきものではないと私は思う。「家」がかつての姿に完全に戻ることは難しいかもしれないが、その形だけでも後世に残すことは大変意義のあることに違いない。

6. おわりに

今回の調査実習で実際に黒島・道下に行ってみて、本だけでは分からないさまざまなことを感じられた。中でも、隣接した地区である黒島と道下の間でもその生業の違いが家のつくりにまで影響を与えていたことに驚きと共にさらに興味を抱いた。黒島・道下の人々には私たちとは別な彼ら自身の世界があって、たった 1 週間では全体を知ることは当然できなかったが、ほんの少しだけどその世界に入ることができたような気がした。少子高齢化などさまざまな問題を抱えている地区であるとは思うが、自分たちの町に誇りを持ち、お互いに助け合うと言う気持ちは現代の日本の人々の多くが忘れてしまった大事な気持ちだと思う。それゆえに、そういった面では両地区の人々にはいつまでも変わらずにいてほしいし、私たちも見習わなくてはならないと思う。

最後に、初対面の方々の家を訪ねるのは緊張したけれど皆さんに温かく迎えていただき本当に嬉しかったです。協力してくださった多くの人たちに心より感謝いたします。